

# コミュニケーション能力を高めるためのカリキュラム研究

## — 各教科の特質を踏まえ地域の協力体制を生かした総合的な学習の時間の単元計画作成を通して —

府中市立府中明郷中学校 行廣 隆宣

### 研究の要約

本研究は、各教科の学習内容と総合的な学習の時間の目標及び学習内容を連関させること、またコミュニティ・スクールとして地域の協力体制を生かすことを通して、「コミュニケーション能力」を高めるカリキュラムについて研究し、考察したものである。まず、カリキュラムマネジメント・モデル等を用いて所属校の「コミュニケーション能力」の育成に関わる課題及び改善案を見いだした。その改善案を基に所属校で校内研修を行い、教員の協働性を生かして各教科の学習内容と総合的な学習の時間の目標及び学習内容を連関させた、「コミュニケーション能力」を高める単元計画を作成した。さらに学校運営協議会で、総合的な学習の時間の取組のうち、協力できることについて意見を聴取し、地域の協力体制の基礎をつくることができた。これらのことから、学校のカリキュラムを、地域の協力体制を生かして改善していく方法が明らかになった。

**キーワード：**コミュニケーション能力 教科と総合的な学習の時間 コミュニティ・スクール

## I 主題設定の理由

コミュニケーション教育推進会議報告「子どもたちのコミュニケーション能力を育むために～『話し合う・創る・表現する』ワークショップへの取組～」(平成23年、以下「報告」とする。)には、21世紀は社会構造のグローバル化が一層進むことによる「多文化共生」の時代であり、コミュニケーションに関する能力の育成を求める社会的要請が高まっていることが示されている。

所属校においても、学校・保護者・地域が連携し、子供たちが各教科の学習で身に付けた知識や技能を活用し、総合的な学習の時間で探究させることを通して、コミュニケーション能力を高めることを目指している。しかし、各教科の学習で身に付けた知識や技能と総合的な学習の時間の学習内容の連関<sup>(1)</sup>が十分でないことや、平成26年度から指定されているコミュニケーション・スクールの取組が教科や総合的な学習の時間の学習内容に生かされていないことから、コミュニケーション能力が十分育成できていないという課題がある。

そこで、生徒に各教科で身に付けた知識・技能等を、状況に応じて活用するコミュニケーションをとることができるように力を育成するため、各教科の学習内容との連関を明確にした総合的な学習の時間の単元計画を作成し、実施する。その際、コミュニケーション能力を高めるための地域の教材の開発及

びそれらのより良い活用方法に関する意見を聴取するために、校務分掌や学年会で作成した単元計画を、コミュニティ・スクールに設置されている学校運営協議会に提案、協議し、聴取した意見を単元計画に反映させる。このように、各教科で身に付けた知識・技能等の特質を踏まえた総合的な学習の時間の単元計画を作成するとともに、地域の教育力を生かしたカリキュラムを開発し、実施していくことは、これから変化の激しい社会を生き抜くために必要なコミュニケーション能力を高めることにつながると考え、本研究題目を設定した。

## II コミュニケーション能力を高めるカリキュラムについて

### 1 コミュニケーション能力について

O E C Dが示している「キー・コンピテンシーの3つのカテゴリ」<sup>(2)</sup>の一つに、「多様な社会グループにおける人間関係形成能力」が挙げられるなど、コミュニケーションに関する能力の育成が求められている。

「報告」では、コミュニケーション能力を「いろいろな価値観や背景をもつ人々による集団において共感しながら、人間関係やチームワークを形成し、情報を共有し、自ら深く考え、相互に考えを伝え、深め合いつつ、合意形成・課題解決する能力」<sup>(3)</sup>と

定義している。

この定義を基に、所属校ではコミュニケーション能力を「①相手の意図を的確に把握しながら聴くこと。②自分の考えを論理立てて伝えること。③集団内における自己の役割を理解すること。④主体的に行動し、他者と協力・協働できること。」の四点とした。以下、本稿では「コミュニケーション能力」と表記した場合、上記四点を示すこととする。

## 2 所属校の生徒の現状分析

平成26年度「基礎・基本」定着状況調査における生徒質問紙調査【生活と学習に関する調査】の表現力領域の結果を表1に示す。

表1 「基礎・基本」定着状況調査 生徒質問紙調査結果

質問紙調査項目	肯定的回答(%)	
	所属校	広島県
(16)自分とちがう意見も受け入れながら、自分の考えを話しています。	83.7	73.0
(17)困ったときや腹が立ったときなど、解決するために、相手が納得するように自分の気持ちを言葉で伝えています。	88.4	69.8
(18)なぜ、そうなるのか、理由をつけて話しています。	69.8	67.8
(19)自分の考え方や意見を、具体的な例をあげ順序に気をつけながら話しています。	76.7	62.3
(20)相手や目的に応じた話し方をしています。	90.7	86.1

所属校と広島県の集計結果の肯定的回答を比較すると、質問項目(20)は90%以上となっており、質問項目(16) (17) (19)は広島県を10%以上上回っているなど、高い数値を示している。しかし質問項目(18)については、肯定率が70%程度と高くなく、広島県とほぼ同水準である。所属校では各教科等の授業において、根拠を明らかにして意見を発表するよう指導してきている。授業の中では一定の成果が見られるようになってきているものの、それを実生活で活用することができていないという実態を示している。

また、平成26年度全国学力・学習状況調査における生徒質問紙調査のうち、コミュニケーション能力に関する質問項目の結果を表2に示す。

表2 全国学力・学習状況調査 生徒質問紙調査結果

質問紙調査項目	肯定的回答(%)	
	所属校	広島県
(7)友達の前で自分の考え方や意見を発表することは得意ですか。	43.9	52.3
(8)友達に伝えたいことをうまく伝えることができますか。	82.9	74.5

所属校と広島県(公立)の肯定的回答の割合を比較すると、質問項目(7)では、8.4ポイント下回っている一方で、質問項目(8)では8.4ポイント上回っている。溝上慎一(2014)は、「親密圏コミュニケーション」(大量の共有知が前提となってのコミュニケーション)という考え方を挙げ、「たとえ親密圏コミュニケーションが得意なものでも、自分の知っていることを、それを知らない他者に説明することは容易ではない」<sup>2)</sup>とし、論理的な言葉で他者に考えを伝えていく言語力に問題があることを指摘している。また、現代社会では、「公共圏コミュニケーション」(相手がどんな人物であるか、どんな知識をもっているか分からず、課題のみを共有している他者とのコミュニケーション)に対するニーズが高まっている状況についても触れている。

これらのことから、所属校の生徒の「コミュニケーション能力」に関する課題は、「②自分の考え方を論理立てて伝えること」にあり、特に、共有知をもたず、課題のみを共有した他者に対して論理的に考え方を伝えていくことであると考える。

## 3 所属校のカリキュラムの現状分析

「コミュニケーション能力」を高めることに関する所属校のこれまでの取組を、田村知子(2011)が提唱している、カリキュラムマネジメント<sup>(3)</sup>の実践の際に配慮すべき要素を構造的に示したモデル図である「カリキュラムマネジメント・モデル」を用いて分析し、図1に示す。

「イ. カリキュラムのP D C A」の「D(実践)」では、各教科の授業において、「小集団での練り合い」「ペア・ワーク」「集団思考での意見交流・合意形成」「振り返りとその交流」などの学習活動を行ったり、総合的な学習の時間において、生徒に学校外の人々と交流することを求める単元を複数設けたりするなど、「コミュニケーション能力」を高めることを目指したカリキュラムの工夫を行っている。しかし、所属校の生徒の「コミュニケーション能力」で課題となっている「②自分の考え方を論理立てて伝えること」を高めるために、各教科で身に付けた知

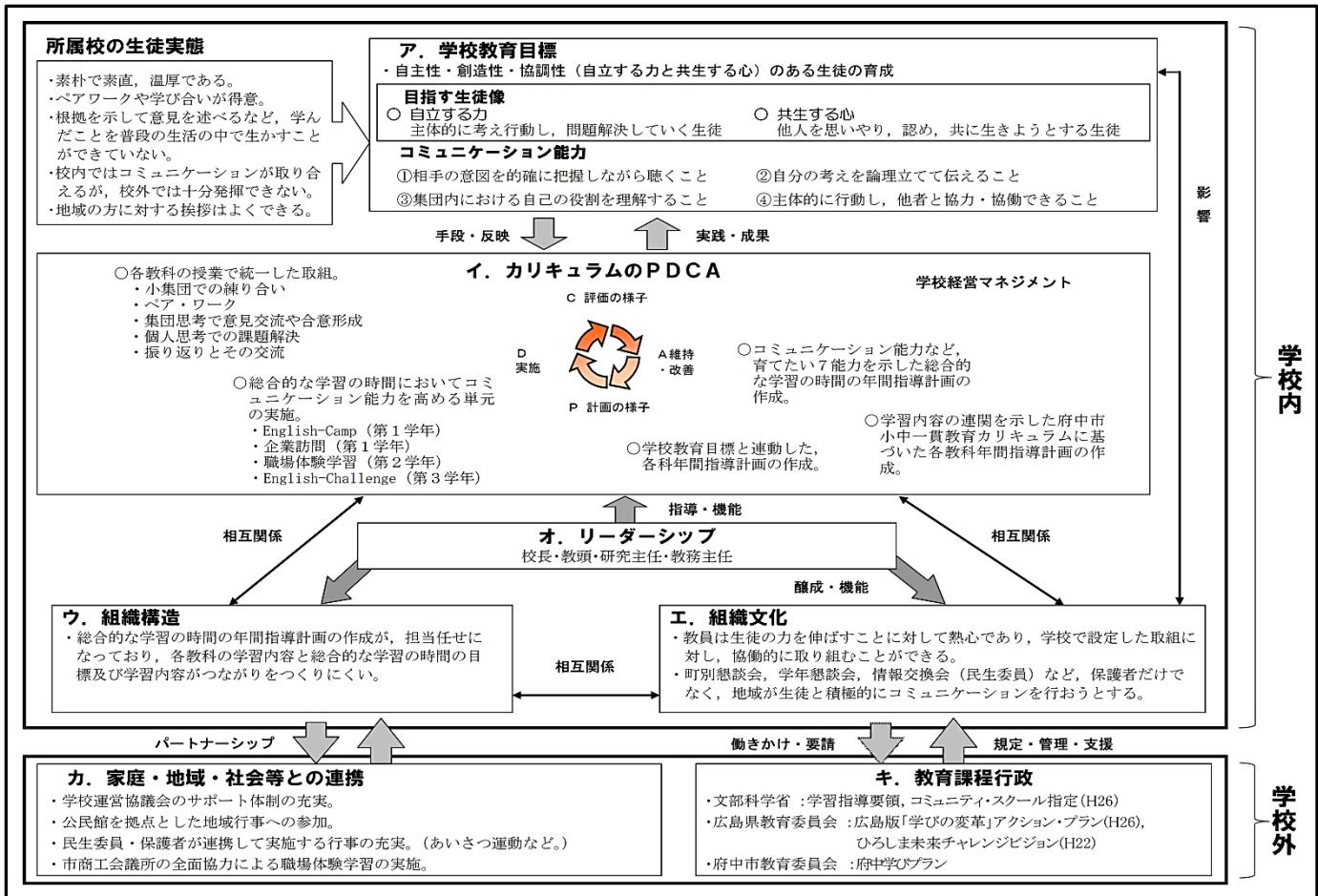


図1 カリキュラムマネジメント・モデルによる所属校のコミュニケーション能力に関する分析図

識・技能等を生かして共有知をもたない他者に論理的に考えを伝える機会を意図的に設定できていないことが分かった。また、「コミュニケーション能力」を高めることを目標にしているが、「C（評価）」において生徒の「コミュニケーション能力」の高まりを評価する機会が十分でないことも分かった。

一方で、所属校の強みは「ポジティブな組織文化をもった教員集団」と「保護者・地域からの強力な協力体制」にあることが再確認できた。

そこで本研究では、生徒が授業で身に付けた知識・技能等を生かして「公共圏コミュニケーション」を行うことを通して「コミュニケーション能力」を高めることができるよう、各教科の学習内容と総合的な学習の時間の目標及び学習内容を連関させることに取り組む。その際、校内研修を計画・実施し、所属校の教員に各教科の学習内容と総合的な学習の時間の目標及び学習内容をどのように連関させることができるかについて考えてもらうこととした。また、学校運営協議会において、保護者・地域から意見を聴取し、指導や評価に生かすこととした。

## 4 総合的な学習の時間と各教科の連関

### (1) 総合的な学習の時間について

中学校学習指導要領解説「総合的な学習の時間編」（平成20年、以下「解説」とする。）の内容の取扱いについての配慮事項（以下、「配慮事項」とする。）

（2）には、「これから時代を生きる生徒にとっては、多様で複雑な社会において円滑で協同的な人間関係を形成する資質や能力及び態度が求められる。」<sup>3)</sup>とし、総合的な学習の時間は、その資質や能力及び態度を育成する場としてふさわしいことが示されている。

また「解説」の第2章第2節「目標の趣旨」（以下、「目標の趣旨」とする。）には、身に付けることが求められる学び方やものの考え方の中に「コミュニケーションの取り方」が示されており、「配慮事項」（2）には、コミュニケーションによる双方の交流が、質の高い学習活動を実現するとしている。

さらに「配慮事項」（6）には、地域の人々の協力を得ることや、社会教育施設及び社会教育関係団体等の各種団体と連携することなど、地域と一体と

なった教育活動の推進について示されている。

これらのことから、総合的な学習の時間は、「コミュニケーション能力」を高めることに適した領域であり、地域の協力体制を生かすことで、その効果が高まると考える。

## (2) 総合的な学習の時間と各教科の連関を図ることについて

「解説」の指導計画の作成にあたっての配慮事項には、「各教科等で別々に身に付けた知識や技能をつながりのあるものとして組織化し直し、改めて現実の生活にかかわる学習において活用し、それらが連動して機能するようにする」<sup>4)</sup> ことが示されており、「身に付けた知識や技能は、当初学んだ場面とは異なる新たな場面や状況で活用されることによって、一層生きて働くようになる。」<sup>5)</sup> とされている。さらに、総合的な学習の時間で身に付けた資質や能力及び態度を各教科等で生かしていくことの重要性も述べられており、各教科等と総合的な学習の時間とは、互いに補い合い、支え合うものであることが示されている。

これらのことから、本研究では、「コミュニケーション能力」を高めるために、各教科の学習内容と総合的な学習の時間の目標及び学習内容を連関させた総合的な学習の時間の単元計画を作成する。さらに、生徒の「コミュニケーション能力」を評価する指標を作成する。

## (3) 各教科の特質を踏まえることについて

「中学校学習指導要領解説総則編」（平成20年、以下「総則」とする。）には、各教科の特質に応じた言語活動の充実について整理されている。これらを基に、所属校生徒の「コミュニケーション能力」を高めるために充実させる学習活動を、表3のようく定めた。

表3 「コミュニケーション能力」を高めるために充実させる学習活動

国語	話すこと・聞くこと、書くこと、読むことそれぞれにおいて、記録、要約、説明、論述する。
社会	よりよい社会を築いていくために解決すべき課題を探究し、自分の考えをまとめること。
数学	数学的な表現を用いて、根拠を明らかにし筋道立てて説明し伝え合う。
理科	問題を見いだし観察、実験を計画し、観察、実験の結果を分析し解釈するとともに科学的な概念を使用して考えたり説明したりする。
音楽	音楽を形づくっている要素や構造と曲想とのかかわりを理解して聴き、根拠をもって批評するなどして、音楽のよさや美しさを味わう。

美術	作品などに対する自分の価値意識をもって批評し合うなどして、美意識を高め幅広く味わう。
技術家庭	実習等の結果を整理し考察することや、生活における課題を解決するために言葉や図表、概念などを用いて考えたり、説明したりする。
保健体育	団体競技で作戦などについて話し合う。集団演技でより良い表現方法を話し合う。
外国語	積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度及びコミュニケーション能力の基礎を育成するための学習活動を行う。

これらの、各教科の特質に応じた「コミュニケーション能力」を高めるために充実させる学習活動によって習得した各教科の知識や技能を、当初学んだ場面とは異なる新たな場面である総合的な学習の時間において活用し、連動して機能するようにしていく。

## III 地域の協力体制を生かすことについて

### 1 コミュニティ・スクールについて

文部科学省は、公立学校の管理運営の改善を図るために、地域住民、保護者等が学校運営に関して協議する機関である「学校運営協議会」を制度化して、個別に設置した学校を「コミュニティ・スクール」としている。「学校運営協議会」と学校及び保護者・地域住民の関係を図2に示す。

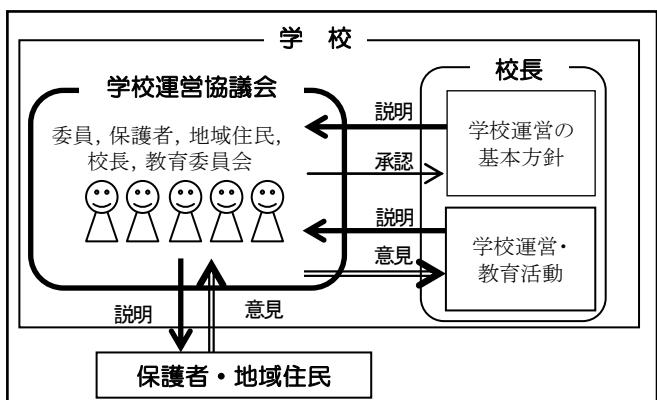


図2 コミュニティ・スクールのイメージ図

「地方教育行政の組織及び運営に関する法律」第47条の5には、「学校運営協議会」の主な役割が示されており、校長の作成する学校運営の基本方針を承認すること及び学校運営について校長に意見を出すことができること、とされている。

### 2 コミュニティ・スクールの協力体制について

地域の教材開発及び地域の教育資源のより良い活用方法に関する意見を聴取するために、学校運営協議会を活用する。所属校の学校運営協議会である「府中明郷学園学校運営協議会」の組織図を図3に示す。

「企画運営委員会」で「コミュニケーション能力」を向上させることに重点を置いた総合的な学習の時間の単元指導計画や、地域の教材の開発及びそれらのより良い活用方法について意見を聴取する。それらを踏まえ、「学校支援活動部会」及び「地域活動部会」に対して、総合的な学習の時間の教育活動の内容を地域へ周知してもらったり、この教育活動への支援を地域に要請をしてもらったりする。

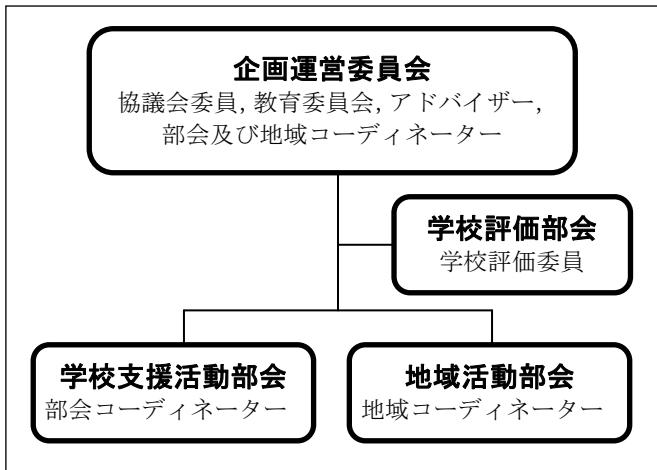


図3 府中明郷学園学校運営協議会組織図

## IV 総合的な学習の時間の単元計画作成の実際について

### 1 各教科との連関をもたせた総合的な学習の時間の単元計画作成のプロセス

各教科の学習内容と総合的な学習の時間の目標及び学習内容を連関させるために、校内研修を中心としたカリキュラム改善計画を作成した。実施した校内研修の内容を表4に示す。

第1回校内研修では、管理職及び各分掌の主任等に出席してもらい、本研究の内容やカリキュラムを改善する必要性について説明するなど基本方針を確認し、合意を得た。

それを受け、第2回では全教員に基本方針を周

表4 校内研修の主な内容等と参加者

回	実施日	主な研修内容	参加者
1	6/16	カリキュラム改善の概要説明 現状分析、コミュニケーション能力について、今後の予定	校内運営委員会

2	6/30	カリキュラム改善の説明 現状分析、コミュニケーション能力について、各教科と総合的な学習の連関、作業日程、質疑応答	全教員
3	7/13	総合的な学習の時間の単元計画作成について 総合的な学習の時間の単元目標と各教科との連関表について、評価指標の作成に向けて	校長 教頭 教務主任 研究主任 学年担当

知するとともに、各教科の学習内容と総合的な学習の時間の目標及び学習内容をどのように連関させることができるか考えもらうことについての具体的な方法や作業日程について説明した。

第3回では、管理職及び総合的な学習の時間の単元指導計画を立案する担当者に対し、総合的な学習の時間の単元目標の見直し及び各教科との連関を一覧表にして表すことについて協議を行った。また、生徒の「コミュニケーション能力」の高まりを評価する評価指標の作成についても協議を行った。

それぞれの研修で、教員から出された代表的な意見を表5に示す。

表5 校内研修で出された教員の代表的な意見

第1回	<ul style="list-style-type: none"> <li>「コミュニケーション能力」の定義が難解。</li> <li>ゴールイメージを共有化できるか。</li> </ul>
第2回	<ul style="list-style-type: none"> <li>「教科と総合」の連関を図る視点はどこか。</li> <li>時間がかかりそうだが、教育効果はあるか。</li> </ul>
第3回	<ul style="list-style-type: none"> <li>連関が見えてきたら、面白そうだ。</li> <li>子供たちにも連関のイメージができれば、教科学力も高まるのではないか。</li> </ul>

研修の初期には、取組に対する不安が現れている意見が多かったが、研修を重ねていくうちにポジティブな意見が増えていった。研修の中では活発な意見交流を行うことができ、教員の協働性の高まりを実感することもできた。

### 2 各教科と総合的な学習の時間の単元の連関について

第2回校内研修で、所属校の教員に、総合的な学習の時間の単元のうち「コミュニケーション能力」を高めることに重点を置いている単元を各学年一つずつ選び、各教科の学習内容と総合的な学習の時間の目標及び学習内容をどのように連関させることができるかについて検討する作業を行うよう指示した。

以下、第3学年の総合的な学習の時間の単元である「English-Challenge」について述べることとする。

表6に「English-Challenge」の目標及び学習内容を示す。また表7は第2回校内研修で教員に示した資料であり、「English-Challenge」と社会科との連関を例として挙げ、説明した。

表6 コミュニケーション能力を高める学習単元の一例

English-Challenge	
<b>3年</b>	<p><b>目標</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>英語の授業で学んだ知識を生かし、外国人と話すことでグローバルな視野を広げ、異文化コミュニケーションを実践する。</li> <li>軍都・廣島、被爆地・ヒロシマ、平和都市・広島の実相を知ることから平和の尊さと必要性を学び、身近な社会における平和の意味を自ら考え、その実現に向けて行動していく態度を育てる。</li> <li>主体的に学び、自らの課題を解決するための方法と態度を学ぶ。</li> <li>班で協力し、校外での集団としてのマナーや態度を学ぶ。</li> </ul>
<b>学習活動・インタビュー内容</b>	<p>生徒4～5名で学習班を構成し、広島平和公園において、外国人観光客に、次のように英語でインタビュー活動を行い、質疑応答を繰り返すことで、コミュニケーション能力を高める。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>挨拶・自己紹介</li> <li>相手について（どこから来たのか、旅行の目的など）</li> <li>各自の研究テーマ（事前に英語で考えておく）</li> </ul>

表7 第2回校内研修資料「総合的な学習の時間と社会科の連関の具体」

学年分野	第1学年地理的分野	第3学年歴史的分野	第3学年公民的分野
学習単元	<ul style="list-style-type: none"> <li>世界各地の人々の生活と環境</li> <li>世界の諸地域</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>第二次世界大戦と日本</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>国際社会と世界平和</li> <li>国際問題とわたしたち</li> </ul>
教科の学習内容との連関	<p>インタビューを受ける人の国籍から、その国や地域に関わる既習知識を総動員して会話すること。</p>	<p>インタビューとして、軍都・廣島、被爆地・ヒロシマ、平和都市・広島の客観的知識を社会事象として押さえておくこと。</p>	<p>国際的な相互関係の深まりの中で、世界平和実現のために国境を越えて協力し合うことが重要であることの認識を深めていくこと。</p>

第1学年地理的分野で学習する「世界各地の人々の生活と環境」や「世界の諸地域」の単元で獲得した知識や技能及び第3学年1学期に歴史的分野で学習する「第二次世界大戦と日本」の単元で獲得した知識や技能を総動員してインタビューに臨む。インタビューを通して触れた価値観や得た経験を踏まえ

て、第3学年3学期の公民的分野において「国際社会と世界平和」や「国際問題とわたしたち」の単元を学習することで、教科の学習が探究的な学習活動にすることができるなど、総合的な学習の時間が各教科の学習内容を深めることにつながると考えた。

このように、各教科と総合的な学習の時間を連関させることによって、コミュニケーション能力を高めることや各教科の学習の充実につながることを全教員に説明した。

研修で所属校教員に提出してもらった意見を基に、「English-Challenge」と各教科の学習単元の連関を示す2種類の一覧表を作成した。

表9は「English-Challenge」と連関する各教科の学習内容を、図4は「English-Challenge」と連関する各教科の学習内容の実施時期を示したものである。

### 3 コミュニケーション能力の評価について

「English-Challenge」のインタビュー活動において、評価対象となる「コミュニケーション能力」について評価指標を作成し、表8に示す。引率教員にこの評価指標を渡し、生徒の「コミュニケーション能力」を見取ってもらうとともに、インタビューした外国人に、生徒と意思の疎通が図れたと思うかについて聴取し評価に生かす。

表8 インタビュー活動におけるコミュニケーション能力を評価する指標

<b>生徒実態</b>	共有知をもたない他者に対して論理的に考えを伝えていくことに課題がある。	
<b>評価するコミュニケーション能力</b>	<b>① 相手の意図を的確に把握しながら聴くこと</b>	<b>② 自分の考えを論理立てて伝えること</b>
<b>到達レベル</b>	<b>おおむね満足</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>外国人の言葉が聞き取れないときは、そのままにせず聞き直すなどして、インタビューを継続することができる。</li> </ul>
	<b>努力を要する</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>外国人の言葉が聞き取れていなくても聞き直さず、一方的にインタビューを行う。</li> </ul>

### 4 地域の協力体制を生かすことについて

学校運営協議会を開催し、本研究の基本的な考え方や改善した総合的な学習の時間の単元計画について説明するとともに、「コミュニケーション能力」を高めるための地域の教材の開発及びそれらのより

表9 English-Challenge と各教科の学習内容との連関（一部）

教科	教科の学習単元【履修学年】	教科の学習内容との連関
国語	「挨拶－原爆の写真によせて」 (詩) 【第3学年】	広島平和記念資料館で学んだことを踏まえて、詩に表現されている内容と現実の世界の在り方とを対応させながら読む。
	「温かいスープ」今道友信(隨筆) 【第3学年】	インタビュー活動を振り返り、登場人物の会話や所作から国際性について筆者の考えを読み取り、真の「国際性」や「協調性」について考える。
数学	「合同と証明」 【第2学年】	合同の学習において獲得した、物事を論理的に考察し表現することや、根拠を明らかにして筋道立てて説明することを、インタビューを行う事前学習に生かす。
理科	「運動とエネルギー」 【第3学年】	平和記念資料館での見学や聴き取りを生かして、核エネルギーの利用について、自分の意見をもって話し合うことに生かす。
音楽	「リズムパターンで構成する音楽の楽しみ」 【第3学年】	リズムパターンを組み合わせ、全体のまとまりを工夫しながら表現を構成することを生かし、インタビュー時の相手の回答によって質問内容を臨機応変に組み合わせ、全体のまとまりを工夫する。
美術	「美術館に行ってきました」 【第2学年】	美術作品を鑑賞する際、作品に対する自らの価値意識をもって批評し合ったように、インタビューする内容に対する自分なりの価値観をもってインタビュー活動を行うことに生かす。
保健体育	「剣道」 【全学年】	武道で学んだマナーや礼儀、相手を敬う姿勢をインタビュー活動に生かすとともに、その経験を剣道の授業で生かしていく。
技術家庭	「国際的なスポーツ大会が果たす文化的な役割」 【第3学年】	インタビュー活動で触れた多様な考え方について振り返り、国際的スポーツ大会にどのような文化的役割があるかを考えることに生かす。
	「家庭と家族関係」 【第2学年】	基礎的集団として構成される家族について学んだことを、様々な国の人たちへのインタビューを通して、比較したりする。
外国語	「エネルギー変換技術の評価・活用」 【第2学年】	エネルギー変換技術の活用の学習を通して、技術と社会や環境との関わりについて学んだことを、インタビュー活動で生かしていく。
	「文化紹介」 【第3学年】	身近な日本の風物などについて英文で表現したことをインタビュー活動に生かす。
	「Fair Trade Chocolate」 【第3学年】	ガーナのチョコレート農園の現状とフェアトレードの意義について理解し、解決すべき国際問題について考えたことを踏まえ、様々な国々の人たちの多様な価値観や考え方と、自らの価値観や考えを比較してみる。
	「A Mother's Lullaby」 【第3学年】	原子爆弾が投下された日のことの物語を読んで、場面の変化や登場人物の心情などを読み取り、インタビュー活動に生かす。
	「Electronic Dictionaries - For or Against」 【第3学年】	活動で身に付けた情報収集力と情報発信力を生かして、各々の意見の内容や論点を読み取り、自分自身の意見を書くことにつなげる。

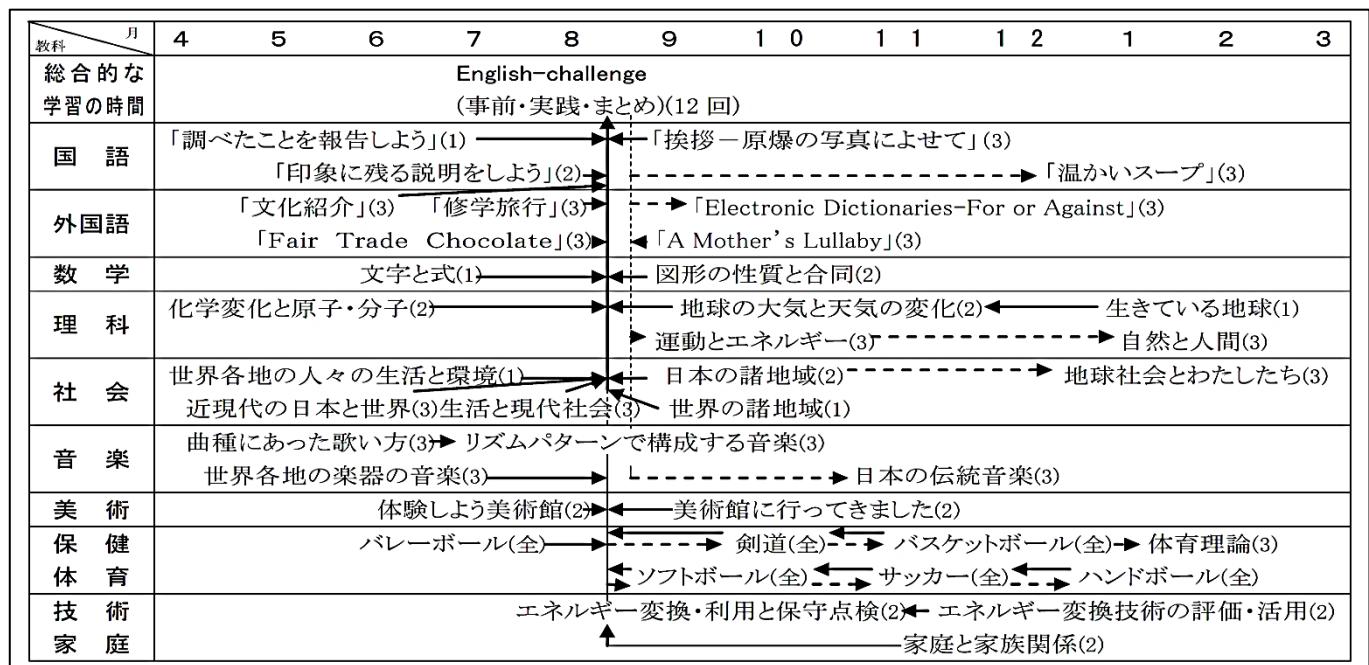


図4 English-Challenge と各教科の学習内容及び実施時期との連関（一部）

良い活用方法に関する意見を聴取した。

その結果、第2学年で実施する「キャリア・スタート・ウィーク（職場体験学習）」において地域の商工会議所や生徒の受け入れ先である各事業所に、効果的な教育活動となるよう学校運営協議会がはたらきかけるなど、全面的な協力が得られた。第3学年「English-Challenge」のインタビュー活動は、地域から離れた場所での活動であるため、地域が協力するという意見は出しにくいが、事後指導等に対して学校から要望があれば協力するという意見が出されている。

学校運営協議会終了時には、「ここからいよいよコミュニケーション・スクールが動き出す。」といった感想を聞くことができ、学校と地域が一体となった教育活動を実施する基礎ができたことを実感した。

今後も学校が知らない地域の情報や、この地域だからこそその教育資源について、保護者・地域の方々から情報提供や提案をしてもらい、生徒たちの教育活動に反映させていく。

## V 研究のまとめについて

### 1 研究の成果

学力調査の結果等から、所属校生徒の「コミュニケーション能力」に関する課題は、「②自分の考えを論理立てて伝えること」にあることを明らかにした。この課題について、カリキュラム上の原因を検討するために、カリキュラムマネジメント・モデル等を用いて所属校の「コミュニケーション能力」の育成に関わる課題及び改善案を見いだした。改善案を基に所属校で校内研修を行い、教員の協働性を生かして各教科の学習内容と総合的な学習の時間の目標及び学習内容を連関させた、「コミュニケーション能力」を高める単元計画を作成した。さらに学校運営協議会で、総合的な学習の時間の取組のうち、協力を得られる内容についての話合いから、協議会に地域の協力体制の基礎をつくることができた。これらの取組を通して、学校のカリキュラムを、地域の協力体制を生かして改善していく方法を明らかにすことができた。

### 2 今後の課題

今後、第3学年「English-Challenge」だけでなく、総合的な学習の時間の他の単元についても、各教科の学習内容と連関させた単元計画を作成していく必要がある。また、所属校は小中一貫教育を行っていくことから、児童生徒の「コミュニケーション能力」の変容を長期的に捉えることができる評価指標及び

評価方法を開発していく。

本研究を通してつくった地域の協力体制を有効活用していくために、学校の教育活動に関する情報を積極的に学校運営協議会に提供する。また、学校運営協議会の組織の体制を整えることで、より効果的に地域と一体となって、変化の激しい社会をよりよく生きていくための資質・能力を身に付けさせることができるよう取り組む。

### 【注】

- (1) 昭和26年の「学習指導要領一般編（試案）」で教科間の連関について示された。連関とは、関連や関係と同義であり、つながりとも言い換えられる。中留武昭は連関性をカリキュラムマネジメントの基軸と論じた。
- (2) OECDはプログラム「コンピテンシーの定義と選択」(DeSeCo)を1997年末にスタート、2003年に最終報告し、PISA調査の概念枠組みの基本となっている。
- (3) 教育課程行政においては「カリキュラム・マネジメント」と表されるが、中留・田村はカリキュラムとマネジメントを一体に捉える立場から「カリキュラムマネジメント」を使用しており、本稿でもそれに倣う。

### 【引用文献】

- 1) コミュニケーション教育推進会議（平成23年）：「子どもたちのコミュニケーション能力を育むために～『話し合う・創る・表現する』ワークショップへの取組～（審議経過報告）」 p. 5
- 2) 溝上慎一（2014）：『アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換』 p. 52
- 3) 文部科学省（平成20年）：『中学校学習指導要領解説総合的な学習の時間編』教育出版 p. 34
- 4) 文部科学省（平成20年）：前掲書 p. 28
- 5) 文部科学省（平成20年）：前掲書 p. 28

### 【参考文献】

- 安彦忠彦（1999）：『新版カリキュラム研究入門』勁草書房  
村川雅弘・野口徹（2008）：『教科と総合の関連で真の学力を育む』ぎょうせい  
田村学（2009）：原田信之外著『リニューアル 総合的な学習の時間』北大路書房  
田村知子（2014）：『カリキュラムマネジメント—学力向上へのアクションプラン—』日本標準  
西川信廣・牛瀧文宏（2015）：『学校と教師を変える小中一貫教育 教育政策と授業論の観点から』ナカニシヤ出版  
天笠茂・合田哲雄（平成27年）：「なぜ、カリキュラム・マネジメントが必要なのか」『教職研修6月号』教育開発研究所  
広島県福山市立駅家西小学校（2012）：『未来をひらくE S D（持続可能な開発のための教育）の授業づくり』  
高浦勝義・松尾知明・山森光陽（平成18年）：「ルーブリックを活用した授業づくりと評価<全3巻> ③生活・総合編』『教職研修総合特集』教育開発研究所